

## 建築家・早間玲子さん 100年後まで残る工場

2020/5/24 2:00

日本経済新聞 電子版



はやま・れいこ 1933 年東京生まれ。建築家。仏共和国建築家会名誉会員。横浜国立大卒、前川國男建築設計事務所を経てジャン・ブルーヴェのアトリエに勤務。パリに日本人で初めて建築家事務所を開いた。仏文化勲章、レジオン・ドヌール勲章、旭日小綬章など受章。

### ■恩師の微笑みと若き日の緊張宿す「レクイエム」■

パリの自宅のステレオセットの上に、一枚の大切なレコードが置いてある。フランスを代表する建築家、故ジャン・ブルーヴェから頂いたモーツァルトの「レクイエム」だ。優雅とも言える鎮魂曲には亡き恩師から学んだ献身と勇気、そして自由という精神を我がものにした若き日の緊張した時間と空間が潜んでいる。



クリスマスに贈られた

1966 年末、私は前川國男建築設計事務所に在籍したまま、日仏工業技術交換留学生としてパリに着いた。留学生事務局に向かう車中、セーヌ川と河畔の木々が穏やかな光を浴びて眼前に広がり、「美しい都市は河川と樹木に恵まれている」と言われた前川先生の言葉が頭をかすめた。

翌年早々から通い始めたデコレーター、シャルロット・ペリアンの仕事場（アトリエ）で、ジャン・プルーヴェに初めて出会った。私はペリアンが用意した在仏日本大使公邸の内部装飾の手描きデッサンをもとに「実施設計図」を制作していた。

プルーヴェはペリアンのデザインするインテリアの素材の選択と技術的な支援をしていた。同時にハイテクを駆使したアルミ製の公邸外壁の設計も委ねられていたので、現場でも何度か出会う機会に恵まれた。素材から形に至る建設的思考に深く打たれ、公邸が竣工を迎えると直ちにプルーヴェのアトリエに入所した。

当時のフランスでは日本人に関する知識は浅く、まして女性建築家は非常にまれだった。入所して初めて任された仕事となった「山岳地帯に建設される建築の課題」のコンペで、幸運にも一等計画案に選ばれてから、フランス人の男性所員と変わらぬ待遇になった。信頼に応えようと心を尽くして仕事に励んだ。プルーヴェとは日々、手描きデッサンを通して理解を深めた。建設現場では監理の役に就いた。

週末、フランス東部のナンシーのご自宅に招待を受けた時、ナンシー派美術館などへ案内された。展示されていた父の作品に尊敬のまなざしを向けながら説明するプルーヴェの言葉を、襟を正して拝聴した。

あるクリスマスの日、「僕にはあなたと同年の娘がいます」と微笑（ほほえ）みながら贈り物を下さった。それが「レクイエム」だ。思い出に触れながら今年2月、みすず書房から「構築の人、ジャン・プルーヴェ」を出版できたのはこの上ない喜びである。

## ■前川國男先生と大笑いした「おかしな猫たち」■

中学、高校の六年間にわたり元東京都立第3高等女学校（現・都立駒場高校）に在籍し、誇り高い女子教育を受けた。しかし卒業後は紅一点のまったく新しい環境が待ち構えていた。横浜国立大学で建築を学んでいた時のことだ。何が真の建築の姿形を決めるのか、という根本的な疑問を持っていた私は、神奈川県立音楽堂に深い感銘を受けた。この建物を手がけた建築家の前川國男から回答を期待できると考え、先生の設計事務所に入ろうと心に決めた。



悩む猫の様子を辛辣に描く

前川國男は日本の近代建築を推進した代表者だ。フランスの建築家ル・コルビュジエの門弟として、国際建築家連合の副議長としてフランスではもちろん、世界的に著名である。入所は困難を極めた。門をたたいて1年後に「来年から来て」と連絡を受けたときの喜びは今でも新鮮だ。

所員は30人。先生は各自の製図板の前に立つと「これ何？」と、懸命に制作した図面に大きなバツテンを付けて次へ移る。いつも飛ばされていた私が突然、バツテンをもらったのは入所から1年以上もたってから。怖くてもううれしい不思議な感動を覚えた。

しかし、さらに数年を経ても担当した設計計画の建設現場に常駐させてもらえなかった。地下何層にも及ぶ大規模な現場に女性を放つのは危険だというのが常識だったのだろう。

ただ、「君はフランスに行くといい」という先生の言葉は耳の奥に残っており、それを実行に移した。先生からの手紙には「パリには僕の青春が眠っている」としたためられていた。

パリのモンパルナスに借りた小さなアパートマンでカクテルパーティを開いた時には、ちょうど当地にいらしていた先生も参加して下さった。その時のお土産がロナルド・サールの「おかしな猫たち」。悩む猫の様相を辛辣に描いた愉快的な漫画本だ。

先生は若者たちに囲まれてニコニコしながらページを1枚ずつめくり、猫の絵を指しながら「これは君だぞ」と一人ひとりからかわれた。みんな、その通りだと大笑い。先生から、日本にいた時とは違うなにか新鮮な印象を受けた。

## ■シャトーでの安全管理合宿で得た信頼■

フランスに渡ってから8年目にあたる1974年、横浜国立大工学部建築学科の卒業資格とフランス国立美術大学（ボザール）建築学科の卒業同等資格を取得した。日仏の建築大学間の最初の資格交流であった。万が一、資格を取得できない場合に備えて私立建築大学 DESA のセミナー講師を引き受けて特待生となり、こちらも卒業できた。



卒業証書が信頼の証しとなった

翌年、フランス共和国建築家会に宣誓して日本人として初めて登録され、76年初め、ジャン・ブルーヴェの温かい視線を背にアトリエを開設した。当時はポンピドゥー・センターが建設中で、世界建築コンペにイタリア人のピアノ達が入選するとフランス人建築家3000人がパリで派手な反対デモを繰り広げた。そのような、まだ閉ざされていた建築界で東洋人女性が独立したのだ。

フランスでは書面上の契約が最も重要だ。建築家が作成する建設施工契約書には建築主の要求事項は当然のこと、追加工事費を回避するために、建物全体を完全無欠に表現しなければならない。契約について学びたいと考えていたとき、内務省管轄の消防司令が建築基準法の要である建築安全管理に関するセミナーを計画しているのを知った。直ちに申し込み受理された。

1週間にわたるシャトー(城)での合宿セミナーはちょっと軍隊的な規律ある形で進行した。宿泊用の部屋はシャトーの主賓室を与えられた。気の合った同僚数人とこっそり抜け出してグルメの夕食というささやかな冒険も楽しんだ。女性は1人だけだったが、最終日にもう1人加わった。

セミナーの卒業証書は法務専門家の資格を取得する免状で、信頼の証しともなった。「建築をする」＝「安全で安いみんなの家をつくる」という目標への第一歩として重要な役割を果たした。そしてまず、83年に始まったパリ国際大学都市・日本館の大規模改修工事の建築家に指名された。

50年間放置された学生寮の改修はフランスでの15年に及ぶ実地経験を通じて知己を得た、

優れた技術者たちの協力を得て竣工した。行政上の手続きは、ジャン・プルーヴェ門下である経歴にも助けられた。

### ■作品が国の文化財に、私より長生き■

フランスのアーキテクト（建築家）は建築物に対して著作権をもつ一方、物的責任を負わなければならない。損害賠償額は高いが、精緻に決められた保険システムによる保証を受けられる。工場を設計監理する際には働く人の安全を守りながら生産設備の機能を保証し、生産開始を遅らせる事故や工期の遅れは万難を排して避けなければならない。工業建築家の義務と責任は非常に重い。



「特筆すべき現代建築」に選ばれた

1983年夏、[キヤノン](#)がブルターニュ地方に計画する新工場の設計依頼を受けた。それは、独立して初めての大型建築物の受注であった。キヤノンの工場は日本企業による当時としては最大規模のフランスでの投資だった。働き蜂ナンバーワンと言われていた日本企業に対して、労働基準局は目を光らせていた。

必要な書類を携えて緊張して担当局に出向くと、担当官は、建築家が説明に来たのは初めてだと満足し、そこから信頼関係が生まれて工場検査は滞りなく運んだ。この経験に勇気もらい、それからは行政当局訪問が習慣となった。誠意はどこでも通じるものだ。

その後、ボージュ県のミノルタ（現[コニカミノルタ](#)）の工場、オルレアン市近郊の日立製作所の工場などを受注して、フランスで数少ない工業建築家の一人となった。知己を得た日本の製造業トップの方々、まさに将の器を備えておられた。

92年初夏に竣工した日立のコンピューター工場はロワール川の南に位置する約70ヘクタールの広大な敷地に、天にそびえる見事な檜（かし）の樹木を避けながら事務棟と工場棟を配置した。日立の方から撤退の知らせを受けたときは、我が子の死に直面したような悲しみに襲われた。

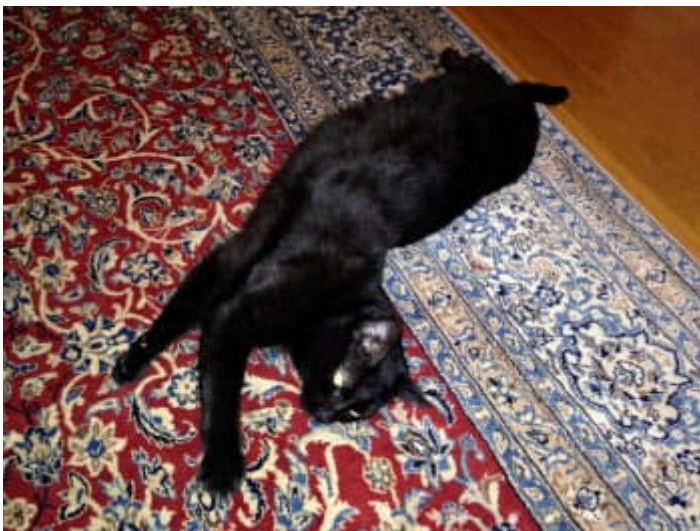
ほとんどの工業建築は持ち主が変われば取り壊される。しかし2019年10月、サントル＝バル・ド・ロワール地域圏の知事から一通の手紙を受け取った。旧日立工場の建築総合計画が、

フランス共和国の「特筆すべき現代建築」の指定を受けたという知らせだった。国の文化財として竣工から 100 年間、建築物の命が保証される。この建築物は私より長生きしてくれるのだ。

### ■祖母の思い出と重なる 優雅な猫の「クロ」■

第 2 次世界大戦前、外交官だった父は幼い私を祖父母のもとに預け母と兄を伴ってワシントンに赴任したが、現地で病死した。母はその後、外務省で翻訳の仕事に携わったが、戦後の過酷な環境の下で健康をむしばまれ若くして他界した。

母が息を引き取る瞬間、祖母は私の手をギュッと握りしめ「武士の娘は泣くではない」と絞り出すような声で言った。私は泣かなかった。祖母は山口県萩の武士の娘として生まれ、変化の大きな明治の時代を生き抜いた苦労人だった。



お気に入りのペルシャじゅうたんに寝そべる

祖母の厳しくもあふれんばかりの愛情を一身に受けて育ち、寛容の大切さを学んだ。彼女と一緒に生活のなかには、いつも付き従う黒猫の姿があった。だから 5 年前、通っているジムに引き取り手を探す 1 匹の黒い猫の写真が張り出されると、すぐに目にとまった。

敷物のように床に張り付いて目もうつつ。集合住宅の中庭に夏休み前に置き去りにされたという。誰も手を挙げなかった。寒さが厳しさを増し、焦りを感じてその猫がいる場所に出かけた。逃げて誰にも捕まらなかったのに、私が迎えの籠を置くとほとんど自分から中に入った。傷だらけだったので獣医に直行し、国の登録手続きに必要な治療を終えて番号を取得した。

クロと名付けたその猫の誕生日は、私と同じ日として登録した。友人と誕生を祝うときにはクロが真ん中の席を動かない。宅配の人にも「ボンジュール」を忘れず、猫ホテルでは人間にも同僚にも親切、ニックネームは「優しいクロ」だ。

小振りな顔のクロがきゃしゃな長い手足で戯れる姿は優雅にさえ思える。感激した時だけニャーとささやき、グ、ゲー、グウと、おイタの眼や甘えた眼で合図を送ってくる。留守にする時、哀愁のまなざしで見つめられると胸が痛む。

アルベルト・シュバイツァー博士が名言を残している。「人生の惨めさから抜け出す慰めは2つある。音楽と猫だ」。友人はクロをシャ（フランス語の猫）ではなくパシャ（オスマン・トルコの総督）と呼ぶ。パシャに限りない幸福を！

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO59438180S0A520C2BC8000/>